

使徒の働き17章10-15節 「聖書を調べる人たち」

1A みことばの熱心な受容 10-12

1B 高貴な人々 10-11

2B 幅広い人々の信仰 12

2A 逃げる宣教 13-15

1B 執拗な扇動 13

2B パウロ独りの旅 14-15

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。今晚は、10 節から見ていきます。私たちは、前回、テサロニケにおけるパウロたちの宣教を見ました。そこだけを見ると、かなり過酷な状況でした。三回の安息日しかいられませんでした。騒動が起こり、「世界中を騒がせてきた」という訴えがなされ、また、「イエスという別の王がいる」という、十字架刑にもなりかねない反逆罪の訴えもなされました。それで、パウロとシラスは夜のうちに、ベレアに送り出されることになります。

身の危険があったので、大した宣教もできなかったのですが、しかし、聖霊は驚くべきことを行っておられたことがよく分かるのが、テサロニケ人への手紙です。第一の手紙で、パウロはこう書き出しています。「1:6-8 あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。7 その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。8 主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。」聖霊による喜びをもって、みことばを彼らが受け入れ、それでその周囲一帯に対する、信者の模範となりました。

私たちはこの前の日曜日に、出エジプト記 1 章で、エジプト人がイスラエル人を労役で苦しめれば苦しめるほど、イスラエル人が増えていき、強くなるので、エジプト人は恐怖に満たされたと言うことが書いてありました。困難な時に、驚くべき聖霊の働きがあるのです。

1A みことばの熱心な受容 10-12

1B 高貴な人々 10-11

¹⁰ 兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。そこに着くと、二人はユダヤ人の会堂に入つて行った。

ベレアは、テサロニケから西南西に 80 キロくらいのところにあります。以前、ピリピでの宣教の時

に話しましたが、ローマ街道がピリピ近郊の港町ネアポリスから始まり、ピリピ、テサロニケと続いている話をしました。エグナティア街道と呼びます。エグナティア街道は、テサロニケからさらに西に延び、アドリア海に面するドュラキウムという、今のアルバニア国にある町ですが、そこが終点でした。けれども、兄弟たちは二人をその街道から外れて南の方に案内しました。

マケドニアが今のギリシアの北部地方で、アカイアがアテネがコリントなどがあるギリシアの南部地方ですが、その中間にエーゲ海に面している、テッサリア(あるいはテッタリア)という地方があります。その地方は山に取り囲まれている平原ですが、ヴェルミオ山脈の北の麓に位置しているのが、ベレアです(今のギリシャでは、ヴェリアと呼ばれます)。

パウロは旅の計画として、ロマ 1 章に書かれていることを見ますと、おそらく、そのままイグナティア街道を西に行き、アドリア海に着きたかったのではないか?と思われます。「1:13 兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。」何度も計画を立てたあるところで、そう想像できるのです。

しかし、テサロニケで騒動が起り、兄弟たちが、ベレアに連れて行くことのほうが安全だと判断したのでしょう。けれども、ベレアに連れて来なければ、彼はアカイアのアテネに行くことはなかつたし、そしてコリントに行くこともありませんでした。ローマに行くのは、使徒の働きの最後、囚人としてカエサルの前に出廷する時です。

神のご計画は、このような逃避行を用いて宣教の働きを進ませていることがわかります。アジアでの宣教もそうでしたね、逃げるようにしてアンティオキアのピシディアから、イコニオン、リストラへ、そしてデルベに行きました。そして、カッパドキア地方全域に福音が広がっていったのです。

¹¹ この町のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ、はたしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べた。

パウロの一行は、いつものようにユダヤ人の会堂、シナゴーグに行きました。これまで説明しましたように、福音は、まずユダヤ人が聞かなければいけないからです。そして実際的なことがあります。私たちは、日本語に訳された、印刷された聖書が手元にあります。あるいは、アプリがスマートに搭載されていますね。しかし、当時は、聖書は、巻き物であり、巻き物はとてつもない労力と時間がかかるて写本されたものであり、それがシナゴーグにしかなかったという事実です。イエスも、その巻き物からイザヤの預言を読まれて、それが今、実現したとナザレの会堂で宣言されました。巻き物があるので、パウロはそこからイエスが来るべきメシアであると論じたのです。

ここでも、同じことをしました。そして、驚くべきことが起こります。ここのユダヤ人たちは、「テサロニケにいる者たちよりも素直で、非常に熱心にみことばを受け入れ」たとあります。テサロニケでは、「ある者たちは納得して、パウロとシラスに従った」とありましたが(17:4)、ベレアでは、次の節で「それで彼らのうちの多くの人たちが信じた(12 節)」とあります。パウロが、これまで、またこれからシナゴーグにおいて、ユダヤ人が多く信じたというのは、とても珍しいです。

彼らの特徴のひとつ目は、「素直」とありますね。これは、素朴さという意味の素直ではありません。この日本語の訳は、ちょっと語弊があります。元々は「高貴」という意味です。彼らが、高貴な人々ということです。先入観を入れずに、公平に見ていくという意味合いがあり、それで英語では「偏見なしに、公平な思い」という意味の fair-minded と訳されています。

私たちが、教会でバイブル・カフェをしていて、いろいろな方がいらっしゃいます。その中には、初めからキリスト教はこうだ！と言って、批判をする人も一部にいます。けれども、先入観があって、分かっていないだけなのに、自分の知識のなさを、偏見で補おうとするのです。これが「心が狭い」ということですね。英語だと、narrow-minded と言います。他方で、すぐ近くにある高校の子たちですね、また、若い世代の人々と話しますと、驚きます。私の話をそのまま聞いて、自分で考えて、それで質問をしてきます。ある時は、教会ならず、神学校で議論するような、実のある内容を質問してくることもあります。これが、高貴な議論というものですね。先入観を除きます。そして、相手の言っていることが何なのか、じっくりと聞きます。これが、こここの言葉の意味です。

聖書にも、二種類の人々が出てきます。ヨハネによる福音書で、3 章に出て来るニコデモがそうです。彼は、イエスご自身に会うためにやってきました。そして、イエスご自身から話を聞きました。後に、最高法院、サンヘドリンで議論がありました。7 章に書いてあります。イエスを信じるユダヤ人たちが多く出てきました。そのことを、群衆は無知だから信じているのだ、パリサイ派や議員で信じた者がいるのか、群衆は無知だから呪われているとまで言いました。見下しています。ところで、私は、識者と言われている人と対話して、相手を鼻っから見下す態度を取る人たちがいますが、そういった人々こそが、見えるものが見えなくなっているのを、何度も見ました。高ぶると、人は見えるものが見えなくなるのです。

しかし、その場に、ニコデモがいました。彼はまさに、パリサイ派議員の一人です。それでこう言いました。「ヨハ 7:51 私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知つたうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」まさに、高貴さ、公平さのことです。ところが彼らは言い返します。「あなたもガリラヤの出なのか。よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。(7:51-52)」預言者はエルサレムやユダから出るけれども、ガリラヤからは起こらない、と。しかし、イザヤは、メシアがガリラヤから出るという預言をしています。「9:1…先にはゼブルンの地とナフトリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、

異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。」パウロが言ったとおりですね、「**Iコリ 8:2** 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのこととまだ知らないのです。」

そして、ベレアの人々は、「熱心にみことばを受け入れ」と言っています。みことばに対する熱心さが、彼らにはありました。聖書にも、この熱心さある人々が出てきます。ヨシヤ王がその一人です。神殿の改修を行わせていたら、律法の巻物が見つかりました。「**II列王 22:10-11** さらに書記シャファンは王に告げた。「祭司ヒルキヤが私に一つの書物を渡してくれました。」シャファンは王の前でそれを読み上げた。11 王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の衣を引き裂いた。」衣を引き裂きました。それは、自分たちがまるで、主に命じられていることを行っておらず、呪いをもたらすと言われていることを、ことごとく行っていることに気づいたからです。

同じように、ネヘミヤ記において、エルサレムに帰還した民が、なんと朝から正午まで、ずっと経ながら、律法の朗読と解き明かしを、国語の分かる子どもたちから年寄りまで聞いていました。「**ネヘ 8:1-3** 民全体が、一斉に水の門の前の広場に集まって來た。そして彼らは、【主】がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って來るように、学者エズラに言った。2 そこで、第七の月の一日に祭司エズラは、男、女、および、聞いて理解できる人たちすべてからなる会衆の前に律法を持って來て、3 水の門の前の広場で夜明けから真昼まで、男、女、および理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな律法の書に耳を傾けた。」そして、彼らもヨシヤと同じように、律法を聞いていて、泣いていました。自分たちが、罪を犯していたことが分かったからです。

このようにみことばを熱心に聞いて、受け入れていきました。そして、彼らは、はたしてそのとおりかどうか確かめるために、「毎日聖書を調べた」とあります。これは、とても大変な作業だったと思います。当時は巻き物です。ですから、巻いたり、開いたり、どこかに書いてあるのを探すのに、今何十倍も時間がかかったことでしょう。それでも、調べて行ったのです。

今、読みましたネヘミヤ記 8 章には、続きに、よく調べたことが書かれています。「**8:13** 二日目に、民全体の一族のかしらたちと、祭司たち、レビ人たちは、律法のことばをよく調べるために、学者エズラのところに集まって來た。」そして、仮庵の祭りを行わなければいけないことが書かれています。彼らは、ずっとやつていませんでした。けれども、主が言われているから、行いました。

このように、聖書を見て、よく調べるという姿勢です。よみがえられ、エマオの途上を歩く弟子たちに語られたイエスは、二、三カ所の聖書の箇所を取り上げたのではなく、聖書全体から説き明かされました。「**ルカ 24:27** それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」聖書全体です。聖書全体にある神のご計画を見ていくために、しっかりと調べていくのです。

2B 幅広い人々の信仰 12

¹² それで彼らのうちの多くの人たちが信じた。また、ギリシアの貴婦人たち、そして男たちも少なからず信じた。

多くの人が信じました。そしてユダヤ人だけでなく、ギリシアの貴婦人たちも信じています。これは、テサロニケでも、またアジアの町でも、起こったことです。ギリシア社会における女性は、動物よりもしかというぐらい、低いものでした。それでユダヤ教の信仰にひかれました。それで、信じていきます。しかし、ベレアではさらに、ギリシアの男たちも少し信じて行ったのです。ベレア全体が、心が開かれていた町と言えます。

2A 逃げる宣教 13-15

私たちは、2018年、このベレアにも訪れました。テサロニケの町が何か、失望しているというか、人々の心がすさんでいたのかお知れないことを、前回話しましたが、今のテサロニケの町にもそれを感じたことも話しました。同じように、今のベレア、ヴェレアと言いますが、町に入ると、何か、とっても落ち着くというか、ゆったりとした思いになりました。不思議なものです。

1B 執拗な扇動 13

けれども、なんとテサロニケから、妬みにかられたユダヤ人たちが、この町にもきました。

¹³ ところが、テサロニケのユダヤ人たちが、ベレアでもパウロによって神のことばが伝えられていることを知り、そこにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。

80 キロぐらいもある距離を、よくもまあ、ここまでエネルギーを使って追いかけて来るものだなど、逆に感心します。アジアの宣教でも、パウロたちは、ピシディアのアンティオケとイコニオンから、リステラまでやって来て、石打をしました(14:19)。これからも、パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしないと徒党を組む者たちの話が、後で出てきます(23:12-13)。このエネルギーはすごいです。

私も、こんなすごくありませんが、驚いた出来事はありました。アメリカに戻った時に、在住している日本人たち向けの聖書セミナーでのスピーカーに招かれました。そこに、日本に住んでいた韓国人の宣教師夫婦が、近隣の日系教会に仕えていました。二回、別々のところに来ましたが、一回目は、何か終末論についてのことを、事細かく訪ねてきました。二回目は、立ち上がって、みなの前で、いかに私の言っていたことが異端的であるかを、滔々と語り始めたのです。

おそらく、彼らにとって、私が異端であり、危険であり、だから、自分たちの縄張りである、日系の教会界隈に、毒がまかれたらいけないという正義感なのでしょう。すごく真剣で、熱心なのですが、熱心に間違っているということってあるんですね。パウロが、ロマ10章でこう語っています。「10:2-

3 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかつたのです。」知識のない熱心さです。その知識とは、義は神にあるということです。自分たちにはありません。それを、自分の知っていることこそが義であり、意見の違いにしか過ぎないのに、相手が不義、悪であるとしていることです。

2B パウロ独りの旅 14-15

¹⁴ そこで兄弟たちは、すぐにパウロを送り出して海岸まで行かせたが、シラスとテモテはベレアにとどまったく。

テサロニケから逃げる時は、パウロとシラスだけでしたが、後からテモテが追ってベレアに来たと思われます。そして、最も目立っているのはパウロです。それで、パウロを送り出しました。ベレアから南東にある港町ピュドナというところまで行ったのではないかと思われます。大体 50 キロです。

¹⁵ パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そして、できるだけ早く彼のところに来るよう指示を受けて、その人たちは帰途についた。

その港から、パウロをアテネまで行く船に乗せ、一緒に行きました。そして、アテネに着いたら、パウロが彼らに言付けました。シラスとテモテに、なるべく早く自分のところに来るよう指示を受けて、その人たちは帰途についた。

なぜ、シラスとテモテをそこに一時的にでもとどませたのか？それは、ベレアの人々に続けてフォローアップするためです。シリアのアンティオケにおいても、その前のサマリアにおいても、主を信じた者たちが現れると、エルサレムの教会がそれぞれ、サマリアにはペテロとヨハネを、アンティオケでは、バルナバを遣わしていました。主の恵みにとどまっていることを勧め、そして、みことばを教えるためです。

新しく信じたら、主に留まるように勧めること。それから、主のことばを教えることです。そして、弟子となっていき、教会の中で長老を立てるところまでできると、教会として建て上げられています。一連のことができるものが理想ですが、できないこともあります。主の憐れみが必要となります。宣教活動で、地域の教会と連携せず、自分で動いている人々には、実が残りません。福音を伝えるだけでなく、勧め、教え、そして養い育てることが必要です。

こうしてベレアにおける宣教をみました。次は、パウロがたった独り、アテネに残されている時のことを見ます。